

《夢》の舞台裏

——カポーティの「銀の壺」——

小島喜男*

トルーマン・カポーティ (Truman Capote, 1924-1984) の短編小説「銀の壺」(“Jug of Silver,”¹⁾ 1945) は一見、小さな奇跡をめぐる物語だ。あるドラッグストアの店主が、ライバル店に勝つための策を巡らし、ワインの空き壺に5セント玉と10セント玉を詰め、中身の金額に一番近い金額を答えた人がその壺をもらえる、という企画を立てる。そして、超能力を持つという少年アプルシード (Appleseed) が、女優になる夢を抱く妹ミディ (Middy) の歯を直すため、壺の中の硬貨を一枚一枚数えることでその壺を獲得する、という物語である。

この作品はたしかに、小さな夢²⁾がかなう心温まる佳編、といえるのかもしれない。しかし同時に、いくつかの疑問点も浮かび上がってくる。まず、銀の壺となるはずのワインの壺は「一ガロン壺 (a gallon jug)」(151)³⁾とされているのに対し、アプルシードがはじき出したいわば正解は77ドル35セント (158)、ということになっている。しかし、アメリカの通常の1ガロン = 3.785リットルから考えると、77ドル35セントでは、最大でも1500枚程度なので、壺の容量に対して明らかに少なすぎるように思われる。

また、このドラッグストアの店主、ミスター・エド・マーシャル (Mr. Ed Marshall) の友人で、店に入入りし、時には店の手伝いもするエジプト出身のハムラビ (Hamurabi) は、「あの子が失敗したときに責任のある人間になりたくない」(156) とか、「こういう希望は誰に与えられるにせ

*専修大学経済学部兼任講師

よ残酷なものだろう、だからそれに自分が関わったことをとても後悔している」(156)と語り手に告げているが、こうした言葉から、ハムラビはアプルシードが壘の金を獲得しなければならない、と感じているように思われる。

さらに、正解発表の場面でも、結局正解を読み上げることになる語り手は、正解を書いた紙が自分の手に渡ったことについて、「どんな経緯でそうなったのかは、訊いてはいけない (don't ask how)」(161)、と言葉を濁している。誰からその紙を渡されたのか、なぜ語り手は明らかにできないのだろうか。

このようなわけで、この作品にはアプルシードの超能力を疑わせ、ある不正が行われたのではないか、と思わせる節がいくつもある。語り手はむしろ意図的にそういう語り方をしているようなのだ。別の言い方をすると、明らかに誰かが不正を働いている、とは言わない代わりに、それを匂わせるような表現がいくつも使われているように思われる。

たしかに、アプルシードの壘の獲得を、超能力による勝利とするなら、それだけの話である。ほかの誰にも真似できない超能力により、彼は正解を知ったのであり、それは彼にしか出来ないこと、という以上の広がりを持たない。ただのファンタジーとでも言うべき作品、ということになる。それに対して、あからさまな不正によってアプルシードが勝利を収めたとして、それを詳細に暴き立てたとしても、それもまたつまらない話である。不正そのものに感動する読者はあまりいない。こういう意味でのリアリズムに徹しても作品は面白くなりそうにはない。この意味で、語り手の語りは、ファンタジーとリアリズムの間を、絶妙のバランスで通り抜けてゆくように思われる。

しかし、さらにその一方で、アプルシードが超能力で正解を言い当てたのではないとするなら、誰かの関与を考えなくては、少なくとも合理的・現実的な説明はつかない。彼の勝利の蔭で不正が行われていたと考えなく

てはならないにせよ、そうしたことに意味があるとするとはそれは何なのか。この作品についての論評や言及⁴⁾は多くはないが、その中にも、アプルシードの超能力を疑問視し、その意味を考察する試みはあまり行われていないようである⁵⁾。そこで本稿では、上に挙げた疑問点を考えながら、作品の流れに忠実にこの作品を読み解き、その意味を考えてゆきたいと思う。

1. ヴァルハラ・ドラッグストア

この作品の語り手である「わたし (I)」は、叔父のミスター・エド・マーシャルのヴァルハラ・ドラッグストア (Valhalla drugstore) で、学校が終わってから働いていた。どこか時代遅れの感のある涼しいこの店のカウンターの奥には、時代物のソーダファウンテンが置かれ、その先にはマホガニー枠の鏡が見え、商品は全て古めかしい真鍮の鍵つきの飾り戸棚に並べられている (150)。重厚で時代を感じさせる内装である。

この店はワチャタ郡 (Wachata County) の人々をひきつけてきたものの、近所にルーファス・マクファーソン (Rufus McPherson) という男が二軒目のドラッグストアを開くと、客を奪われてしまう。マクファーソンは扇風機などの新しい内装品に加え、車まで品物を運ぶサービスなどを始め、町の人々の心をつかんでいた。ミスター・マーシャルは、苦々しく思いつつも、この商売敵を無視する。そして、ある日「わたし」が店に出ると、禁酒主義者のはずのミスター・マーシャルは、常連客のハムラビとドミノをしながらワインを飲んでいて (150)。

この作品の舞台となるドラッグストアと、二人の中心人物は、冒頭でこのように紹介される。ドラッグストアといっても、ただ薬や日用品を売るだけではなく、ソーダ・ファウンテンやカウンターを備え、喫茶店を兼ねた、いわば町の社交場のような感じの店である。ストーリーの展開を追う

前に、まずはこの店と、この二人について検討しなくてはなるまい。

店の名はヴァルハラ・ドラッグストアである。ヴァルハラとは北欧神話に登場する死と戦いの神オーディーンの館であり、オーディーンはここに、戦場で英雄的な死を遂げた戦士を迎え入れる、とされる。日中戦いに倒れた戦士たちは、夜になると甦り、この館での宴に加わる。このようなもてなしは、最後の戦いのための軍勢を高貴な死者の中から集めるため、ということである⁶⁾。

この北欧神話によれば、ヴァルハラの名を持つこのドラッグストアは、戦いに倒れた兵士の甦りの場所となるはずである。そして、この店の主が、ミスター・マーシャルである。「わたしは彼をミスター・マーシャルと呼んでいる。それは、奥さんを含めて誰もが、ミスター・マーシャルと呼んでいたからだ。にもかかわらず、彼は素晴らしい人物だった⁷⁾」(150)と語り手は言う。傷ついた兵士の集まるヴァルハラの主として、このミスター・マーシャル＝元帥閣下、司令官閣下という名はふさわしい。彼は、ここにやってくる兵士の上に立ち、この場を取り仕切る人物なのだ。この点の持つ意味に関しては本稿の最後で論じたい。

語り手は、「ハムラビはエジプト人である種の歯医者だが、仕事はあまりうまくいっていなかった…」と言う。それは、この町の水に歯を強くする成分が含まれているためだ。彼はヴァルハラの常連で、身長は7フィート近く、浅黒くハンサムで、町のご婦人の人気をさらっていた(151)。

語り手はさらに、「ハムラビの言葉には外国語訛りがなく、だから私は常に、彼がエジプト人とはいえないのは、月に住む人間をエジプト人だといえないのと同じだ、という意見だった」(151)と言っている。語り手の言葉はおそらく、ハムラビはエジプト出身だが、現在はアメリカ人だ、ということの意味している。要するにハムラビは移民⁸⁾なのである。語り手の言うように彼は技術を身につけた「ある種の歯医者」なのだろうが、しかし町の人たちの歯が丈夫なため、その仕事もうまくいってはいない。エ

ジプトからの移民であるハムラビの、仕事での苦勞が、ここでは暗示されている。《アメリカの夢》を信じてアメリカを目指した移民の一人であれば、彼は努力と運に成功の夢をかけていたはずである。この点は、これからのストーリー展開の重要な要素のように思われる。

作品の冒頭ではこのように、舞台となるヴァルハラ・ドラッグストアとその主人ミスター・マーシャル、その友人でエジプトからの移民のハムラビという、主要人物が語り手により紹介される。ある日、この店に出勤した語り手は、思いがけない光景を目にする。

2. 銀の壘

ヴァルハラ・ドラッグストアへ出て来た語り手は、禁酒主義者のはずのミスター・マーシャルがハムラビと、イタリアの赤ワインを1ガロン入りの壘から飲んでいるのを見て驚く。しかもミスター・マーシャルは語り手にもワインを飲むように言う。二人の目的は実はこの壘を空けることで、壘が空になるとミスター・マーシャルは町へ出かけ、その後彼が持ち帰ったこの壘には、5セント硬貨と10セント硬貨が一杯に詰め込まれていた(151-52)。

ミスター・マーシャルが、「こいつは、銀の壘とでも呼んでもらうかな…」と言うこの壘は、店のクリスマス企画の目玉だった。店で25セントの買い物をする、この壘の中身の金額を一回当てることができ、その予想をクリスマス・イヴまで記録し、壘の実際のコストに一番近い予想をした人が、中身の金をすべてもらえる、という企画である(152)。

この企ては大当たりとなり、人々はこの壘の虜となって、店は大いに繁盛する。その繁盛ぶりは、駅長タリー (Station Master Tally) が、駅の裏手で油田を発見したと言い、「町中が試掘しようとする者たちであふれ返

るきっかけとなった」時以来だ。それでも中にはこれをギャンブルとして非難するものもいたが、かれらも逆に予想に興奮してしまう（152）。

語り手はかつての油田騒ぎと一部のまじめな人たちの非難に言及することで、この企画の本質的な点を指摘しているように思われる。「銀の塚」の中身の金額を当てるこの企画では、応募者は自身の予想に賭ける以上、たしかに非難のようなギャンブル性がある。一攫千金とまでは行かないが、ある程度金額を得られる一種の賭けである。一方で、油田を発見すればその一攫千金の夢が実現する。かつて油田騒ぎで盛り上がった町の人々には、ギャンブルに熱中する素地があるのだ。賭けに、あるいは一攫千金の夢に熱狂せずにはいられないこの町の人々のアメリカの精神が、ここで暗示されている。

町の人たちは遊びや気晴らしとして、純粋に銀の塚の賭け、金額の当てっこに夢中になり、それを楽しんでいる。ところがその時、少し変わった子供たちが店にやってくる。

3. アプルシード登場

ここでアプルシードとその妹ミデイが登場する。彼らはよそ者で、町には知り合いはいない。自称十二歳のこの少年は、自分にはアプルシードという名しかない、と言い、インディアン・ブランチエズ (Indian Branches) から1マイルの農場に住み、母親は体重74ポンドしかなく、ヴァイオリン弾きの兄がいる、と言う。髪は暗い黄色で顔は日に焼け、緑色の目は憂いを湛え、大人びて賢げである。背は低く、弱々しい。服装はいつも変わらない。ミデイによれば、彼は実は八歳だという（153）。

とある雨の日に初めてヴァルハラ・ドラッグストアへやってきた二人は、カウンターでグラスを磨く語り手に、銀の塚について、「誰かにあげるん

だったら、ほくらにくれれば感謝するんだけど」と話しかける。語り手はここで、ミディについて、やせた悲しそうな子供で、アプルシードより年上に見え、髪は亜麻色で、顔は青白い、と語る。着ている服は小さくなっている。そして、歯並びの悪さを隠そうとしている点に触れている (153)。物語の最後でわかるように、アプルシードが銀の塚を手に入れようとするのは、女優になる夢を持つ、彼女の歯を治すためである⁹⁾ (162)。

語り手は銀の塚のことをミスター・マーシャルに訊くように言い (153)、アプルシードはそのとおり彼から説明を受ける (154)。銀の塚の前に立ったアプルシードは、25セントが必要なことをミディに話し、「ただひとつ気がかりなのは、いちかばちかの当てっこをするわけにはいかないってことだ。…ほくは答えを知らなければ (原文イタリック体) ならないんだ」と言う (154)。塚の金額をあてるのではなく、「知る」ことを目指す彼の決意は、店に集まる人たち、とりわけミスター・マーシャルとハムラビに大きな衝撃を与えることになる。

彼らは数日後にも姿を現し、アプルシードは今度は自分の家族について話す。それによると、母方の祖父はケイジャン (Cajun) で、英語がうまく話せず、兄は、「黄色い髪」の女をめぐって剃刀の喧嘩をするなど、三回刑務所に入っている (154)。アプルシードの言うように、彼の一家はもともと移民であり、祖父の代でケイジャンとして南部に移ってきたのだった。裕福とは思えないアプルシードの一家は、移民の苦勞を味わっていることが推測される。

その一方で、この少年は、アプルシードという伝説の開拓者の名前を名乗っている。開拓者はイギリスから自分の土地を求めてアメリカへ渡り、自力でアメリカの大地を開拓して自分の土地を掴もうとした。夢を追いかけて、自分の力を信じ、そしてチャンスにかける、というアメリカ開拓当時から精神が、この名に暗示されているように思われる。

ケイジャンの祖父を持ち、その一家は苦勞を味わったであろう、開拓者

の名を持つアプルシードは、銀の壘を前にして、町の人々のような遊びや楽しみに加わろうとはしない。

4. 数えるアプルシード

家族のことを人に話すのはよくない、と言うミディに、歯を気にせずに、映画雑誌でも見ているように、とアプルシードは言い、彼はここで奇妙な行動に出る。「アプルシードはここで数えごとをするんだ」と彼は言い、そして「その数えごととは、まるでその目で壘を食べ尽くしてしまうかのように、じっと壘を見つめることを意味していた」。まばたきせずに壘に集中していた彼は、「ルイジアナのある女の人が、他の人には見えないものがぼくには見える、って言ったんだ。ぼくが幸福の帽子¹⁰⁾ (a caul) をかぶって生まれてきたからだよ」とも言う。思いついた数字で当たるかもしれない、と語り手は言うが、アプルシードは、「ぼくはね、そんな賭けはできないよ。ぼくがその中身を数えるやり方だけど、間違いのないやり方はたった一つ、それが5セント玉と10セント玉を一つ一つ数えるこのやり方なのさ」と譲らない (154)。

アプルシードの言っていた壘の中身を知る方法 (154) とは、このことだった。彼は町の人たちのように、楽しみながら中身の金額を当てようとはしない。それを「数える」というのである。それはある種の《仕事》であり、《努力》をとまなう。そして彼は「ルイジアナのある女の人」の言葉に言及し、自分は「幸福の帽子」をかぶって生まれてきたから、不思議な能力がある、と主張する。しかし、その女性がそう言ったとして、その能力を裏付けるものは何一つない。結果的に銀の壘を手にするアプルシードは幸運な子供といえるかもしれないが、彼の能力を証明するものは何もない。彼の勝利に関しては、彼と周囲の行動を詳しく検討する必要がある。

アプルスードの企てに対する語り手の驚きの声は、ハムラビの耳に届き、彼もアプルスードの試みに興味津々である。「X線の目を持たなくちゃならない、としか言えないね、君」とあまり本気で考えようとしなないハムラビに、アプルスードは、「そうじゃないんです。頭に幸福の帽子をのせて生まれさえすればいいんです。ルイジアナの女の人がぼくにそう言いました。その人は魔女だったんです…」とまじめに説明する。ハムラビは「と、も、お、も、し、ろ、い (Ve-ry in-ter-esting)」と答える (155)。

アプルスードは二度にわたり「ルイジアナのある女の人」(154)の言葉に言及し、「幸福の帽子」をかぶって生まれた自分には不思議な能力がある、と主張する。「魔女」ということになっているこの女性は、ある種神秘的な存在のようなので、おそらく8歳のアプルスードがその言葉を鵜呑みにするのはある意味当然とも思われる。しかし、彼が実際に透視能力を持つかどうかは、この先で考えるように、かなり疑わしい。アプルスードは壇の中身を数えようとするが、正解発表の場面をみると、実際に一枚一枚数えることができているとは思えない (161)。となると、彼がこの女性の言葉で伝えているのは、自分が「幸福の帽子」をかぶって生まれてきた、と言われた、という事実である。アプルスードは、自分には運がある、ということ信じ、それをアピールしているだけなのだ。

このように自分の運を信じることは、巡って来たチャンスをとらえ、《アメリカの夢》を実現しようとするアメリカ人としては重要な点であろう。銀の壇を前にしてアプルスードは、一攫千金とまでは行かないものの、まとまった金を手にするチャンスに自分の運を賭け、《数える》という努力を惜しまない。

映画雑誌の写真の女性の歯がきれいだと、言うミディに、アプルスードは歯を気にしないように、と言う。ミディは映画女優にあこがれている (155)。この先でわかるように、彼女は歯の美しさを女優への条件の一つと思い、自分の歯を気にしている (156)。

そしてハムラビは、二人が帰ってから、「君はあの子は大丈夫だと思うかい」と、「当惑した声で」語り手に尋ねる（155）。ハムラビはアプルシードの思いつきを、他愛ないものと片づけることはできない。この先で正解発表を前にして、ハムラビは彼の姿に悩まされることになる。

5. ハムラビの悩み

町では日を追ってクリスマスを迎える準備が進む。子供たちが山から緑の木を取ってくるし、フルーツケーキ、ワインの壺が用意される。郡庁舎前の木のイルミネーションやクリスマス・キャロルの歌声に、雰囲気は高まってゆく。ところがアプルシードだけは、この雰囲気の外側で、毎日壺に集中し、金額を数えている（155）が、25セントを手に入れることはできていないようで、何も買い物はしない（156）。

アプルシードに興味を寄せるハムラビは、時々キャンデーを買ってやったりする。「あの子は気が変だと、まだ思ってるの」と尋ねる語り手に対し、ハムラビは、はっきりそう思っていない、と言いつつ、おそらく満足な食事をしていないアプルシードらに、バーベキューを奢ってやりたい、と言う（156）。

25セントのほうが好きなのは、と言う語り手に、ハムラビは、必要なのはバーベキューだ、と言いつつ、「…金額を当てようなどとしなければいいのに。ああいう緊張しきったような子で、異常なくらいだし、あの子が失敗したときに責任のある人間になりたくない。そうなったらみじめだ」（156）と続ける。そして、ミスター・マーシャルもアプルシードを気の毒に思っていることが、語り手の口から告げられる（156）。

銀の壺に夢中になって一心に中身を数えるアプルシードが、結果的にこれを手に入れられなければ、気の毒なのは容易に推察できる。しかし、ハ

ムラビはその場合に「責任のある人間になりたくない」とまで言い、「そうならみじめだ」と言っている。もちろんかわいそうだろうが、もともと店のクリスマス企画の当てっこのなだから、誰も《責任》を追求される筋のものではないことは、ハムラビにも分かっていることだろう。それでもあえて、彼は《責任》を口にしている。

アプルスードは常軌を逸した真剣さで銀の壇に取り組んでいる。彼にとってはただの《遊び》ではなく、いわば一つの《仕事》として、壇に《努力》を傾注している。また、《幸福の帽子》に暗示されていたように、アプルスードは自分の《幸運》を強く信じている。つまり、彼は壇を手に入れるという《夢》を目指し、《幸運》をかけて《努力》を惜しまないのだ。小さな《アメリカの夢》を追い求めているのである。誰しもこのような姿に対しては心を動かされ、とりわけ《努力》した人間がその報酬を手に入れるべきだ、と考えるのではなかろうか。

そしてまた、ハムラビは、エジプトからの移民として描かれていた。「ある種の歯医者」としてうまくはいっていない彼（151）には、この点はさらに切実なはずである。現実は厳しい。しかし、やはり、努力は、真剣な努力は報いられるべきだし、そういうアメリカであってほしい。アプルスードの努力が実を結ばないということになれば、それはハムラビ自身の信念の否定ということにもなる。ハムラビはおそらく、アプルスードの《努力》を目の前にして、《遊び》としての銀の壇の企画に荷担し、アプルスードを真剣にさせてしまった自分自身に対して、後悔の念を募らせている。

6. アプルスードの執着

語り手はアプルスードを少し変わった子供としか思わなかったが、彼はひたすら壇に集中するばかりで、子供たちがからかおうとしても相手にしな

い。「それでも彼はあまりに自分に引きこもっているようなので、彼はここにいないのではないのか、というぞっとするような気分になることがある」と語り手は言う。しかしそう思っていると、アプルシードは時として、「ねえ、あの中に1913年のバッファローの5セントがあるといいな。誰かが言ってたけど、1913年のバッファローの5セントは50ドルの値打ちのこともあるんだって」などと言ったり、「ミディは映画女優になる。あの人たちはお金をたくさん稼ぐんだ、女優の人たちはね…ただミディは、歯がよくないと映画には出られないっていうんだ」と言ったりする(156)。

驚くべき集中力で壘の中身を数えるアプルシードが、時として漏らすこうした言葉には、彼のいわば《本音》が隠されているように思われる。彼は「1913年のバッファローの5セント」があればいい、と言うが、アプルシードに本当に透視能力があるのなら、それがあらかんどうかは文字通りお見通しのはずではないだろうか。たしかに、そこまで完璧な能力でなくとも、壘の中の枚数は数えられるのかもしれないが、彼の超能力には多少疑問符をつけたくはなる。

また、物語の最後で明らかになるように、アプルシードが壘の中身にこれほどの執着を見せる理由は、映画女優を目指すミディの歯を直すことである(162)。アプルシードはそれとなく自分の行動の理由をここで漏らしている。そして語り手も、ミディがいないときは、「アプルシードはいつもの彼ではなく、シャイな振舞いですぐに出て行った」ことを告げる(156)。

ハムラビはアプルシードにバーベキューを奢ってやり、アプルシードはハムラビのことを、とてもいい人だと言い、また、「でも変なことを考えてます。エジプトというところになれば、王様かなんかだと、思い込んでいるんです」(156)とも彼は言う。ハムラビがエジプトからの移民だということが、ここで確認できる。

ハムラビのほうは、アプルシードについて、「あの子には誰よりも胸を打つような信念がある」と言い、また、「こういう希望は誰に与えられる

にせよ、残酷なものだろう、だから、自分が関わったことをとても後悔している」と言う（156）。アプルシードの執着を日々目の辺りにしているハムラビは、彼にこれほどまでの努力を傾注させてしまったことに、後悔の念を覚えている。

店の周辺では、気晴らしとして賞金の使い道が話し合われる。パーマをかけたり、中古のピアノや、シェトランド産のポニーを買うことなど、夢が語られるが、アプルシードはどうしても自分のほしいものを言おうとはしない。語り手は、「それがなんであろうとかまわないとしても、彼はそれをひどくほしがっていた」と言う（157）。それは、すでに触れたように、ミディの歯を直すことだった。クリスマスの雰囲気が高まる中で、アプルシードは今日も、鬼気迫る執着心で銀の壘を凝視し続ける。

7. 硬貨をすべて数えて

例年では一月末にならないと本格的な寒さに見舞われないこの町だが、この年はクリスマスの前の週に、語り草になるほどの寒さに襲われた。絹糸工場周辺の貧しい人たちは、話をして夜の寒さを紛らせ、農家では作物に麻袋をかぶせ、祈るばかりだった。町の酔っ払いの R. C. ジャドキンスさん (Mr. R. C. Judkins) は安売り店でサンタ・クロースに扮し、彼がしらふでいるのを町の人々は喜ぶ。教会の親睦会でミスター・マーシャルとルーファス・マクファーソンが顔をあわせ、一触即発とはいえ、言い争いで済んでいた（157）。

アプルシードは町から3マイルほど離れた農場から、寂しい道を歩いて店まで通ってきていた。口の周りの苦勞のしわとともに、疲労の色が、その表情には認められる（157-58）。生活が楽ではないなかで、アプルシードは、依然真剣に銀の壘を手に入れようと努力を続けている。

クリスマスの3日前になって、彼は、「さあ、終わったぞ。壘の中にくらあるか、わかったよ」と言う。語り手は、「彼はこのことを、とても真剣に、厳かな確信をもって口にするので、彼のことを疑い難いのだ」と言っている(158)。真剣な努力に精魂傾けてきたアプルスードには、ある種の説得力が感じられる。

しかし、数えることで正解の金額に行き着けるとは思わないハムラビは、「こういうことが分るわけないんだよ。そう思うのは間違ってる。きみは自分を傷つける方へ向かっているよ」と言うばかりだ(158)。ハムラビはアプルスードの努力が結果的に裏切られてしまうことを真剣に心配して、それを止めさせようとしている。しかし、アプルスードは、「自分が何をしようとしているのかは自分でわかってます。ルイジアナの女の人が、ほくに言ったんです」と譲らない(158)。「ルイジアナの女の人」とは、「幸福の帽子」をかぶって生まれてきたアプルスードに超能力がある、と言ったという、いわゆる「魔女」だった(155)。アプルスードはこの言葉を信じ、すなわち自分の《能力》と《幸運》を信じて、ハムラビの言葉に耳を貸そうとはしない。このように言い張るアプルスードに対し、ハムラビは、「そうそう、そうだね。でもそのことは忘れなくちゃだめだ。私なら家に帰って、じっとして、こんないまましい壘のことは忘れるよ」と言う(158)。アプルスードが語る自らの《幸運》は、ハムラビには根拠があるようには思われぬ。ハムラビはおそらく、アプルスードの努力が挫折に終り、彼が傷つくことを、そしてその結果、自分の信念が裏切られることを、怖れている。

しかし、ハムラビの心配をよそに、アプルスードは、自分の兄が今夜、結婚式でヴァイオリンを弾き、25セントくれることになっている、と告げ、「明日、ぼくはチャンスに賭けてみます」と宣言する(158)。

7. 77ドル35セント

翌日、25セントを持って店に姿をあらわした二人は、相談の末、クチナシの香水 (gardenia cologne) を買うことにする。ミディはすぐに自分の髪に振りかけて、その素晴らしさに感嘆し、「アプルシード、今度はあなたの髪にもかけさせて」と言うが、彼は絶対にそうさせようとしない(158)。アプルシードの名は有名な開拓者に由来する。彼は開拓以来のアメリカ精神を受け継ぐ少年として描かれており、開拓社会はおそらく、力がものを言う男性的・実力主義的社会と考えられる。だからこそ、アプルシードはここで、香水を髪にかけるような、いわば女々しいことを避けているのではないだろうか。

ミスター・マーシャルが帳簿の用意をしていると、客が何人かアプルシードの周りに集まってくる。「それじゃ、きみ、いくらだい」という問いに、アプルシードは、「77ドルと35セント」と答える (158)。

冒頭で見たように、《銀の壘》に使われたのは1ガロン壘だった。1ガロンは、アメリカでは通常3.785リットルとされている。日本で言えば大体一升壘二本分というところだろうか。《銀の壘》の中身は5セント硬貨と10セント硬貨だけということになっているから (152)、77ドル35セントとすると、全部5セントの場合枚数最大で1,547枚、5セント一枚とあとは10セントの場合で最小枚数の774枚となる。この数字は、たとえ最大値を考えても、3.785リットルには少なすぎはしないだろうか。結局《正解》ということになるアプルシードの答は、このような理由から、かなり怪しい、ということになるろう。

答を登録したアプルシードが、「ぼくが勝ったのか、いつわかるの」と尋ねると、誰かが「クリスマス・イブだよ」と答え、アプルシードが「明日ですよ」と言うとき、「ミスター・マーシャルは「そう、そのとおり」

と驚きもせずにそう言った」、と語り手は伝える (159)。

このやりとりで、語り手は、ミスター・マーシャルが「驚きもせずにそう言った」とコメントしている。ということは、ミスター・マーシャルは驚くべき状況にもかかわらず、驚かなかった、ということになる。ところが、発表の予定日を答えただけの彼が、なぜ驚かなくてはならないのか。マーシャルが驚くとすれば、その前の「ぼくが勝ったのか、いつわかるの」というアプルシードの言葉があまりに自信満々だったため、自分の勝利を前提として発表の日を尋ねているように響いたからであろう。アプルシードの自信に対して、ミスター・マーシャルが平然と捉え、驚きもしなかった、とすれば、ここで、主催者であるはずのミスター・マーシャルがアプルシードの勝利を当然視しているかのような、いわば《疑惑》が、浮かび上がってくる。しかも、ミスター・マーシャルは、アプルシードの壇への取り組み方を見て心を傷めていた (156)。彼にはアプルシードを不正に勝たせる《動機》がある。しかし、もちろんこのコメントだけでそう断定するわけにはいかない。

8. アプルシードの答

前日の夜は冷え込み、明け方には短い暴風雨に見舞われ、翌日のクリスマス・イヴは窓のガラスが霜に覆われる凍える晴天となり、町は北部のような様相を呈す。そんな中を、R.C. ジャドキンスさんはウイスキーを飲みながらぶらつき、長老派教会の合唱が響くなか、子供たちは仮面をつけて大騒ぎする。ヴァルハラのお店には、ハムラビがみかんを手土産に飾りつけを手伝いに来る。ミスター・マーシャルは銀の壇を磨きため、テーブルに置きなすが、その後は壇に緑色のリボンを結んだり解いたりするばかり。店の仕事は「わたし」とハムラビでしなくてはならなかったが、終わ

れば優雅な雰囲気漂う (159)。

クリスマスの支度はもちろんのこと、ヴァルハラ・ドラッグストアは「銀の壘」の企画の正解発表の場にもなる。飾りつけは済ませておかななくてはいけない。ところが、店のオーナーであるミスター・マーシャルは、仕事が手につかない。上に見るように、銀の壘を磨き、テーブルに安置するものの、壘に緑色のリボンを結んだり解いたりするばかりだ。彼はおそらく、アプルスードの出した答えが気になって仕方がない。ミスター・マーシャルがこの時点で正解を知っているのかは、わからない。彼の言葉を信じる限り知らないことにはなっている (160)。しかし、大人のミスター・マーシャルには、瓶の大きさなどから、それが正解である可能性も分かっているのではないだろうか。そして彼もまたアプルスードの《努力》を目の辺りにしてきた。もしかしたら、彼も、アプルスードが負けることを、ハムラビ同様に懸念しているのではないだろうか。

仕事が終わりに、ハムラビが店を出て行こうとすると、ミスター・マーシャルが声をかける。するとハムラビは、「あの子の顔を見たくないんだ。…そういうことが私の良心にのしかかってきて、騒ぐわけにもいかない。いまましいが、眠れないだろうな」と答える。マーシャルは、肩をすくめて、「好きなようにしろよ」と言うが、語り手は、「そして彼は肩をすくめたが、本当に心を痛めていることは誰が見てもわかっただろう」と語る。そしてマーシャルは、「人生とはそんなものさ——それに、わからんもんだよ、あの子は勝つかも说不定いよ」と言う。ハムラビはアプルスードの答えた金額を尋ね (159)、「わたし」が77ドル35セントと言うと、「それは素晴らしい答えじゃないのか」と訊き返す (160)。

クリスマスの雰囲気が町の中にも店の中にも高まっていく中、アプルスードの《努力》を知るハムラビとマーシャルには、憂鬱が募ってゆく。二人とも、《努力》の報われる世の中であってほしいと思い、それゆえ彼に勝ってほしい。しかし、壘の金額を《当てる》ことは至難の業であり、

アプルスードは本物の超能力を持っているようにも思われぬ。二人の大人の気分は重くなるばかりだ。そんな中で、マーシャルの「あの子は勝つかも知れないよ」という言葉は何を表すのか。彼がアプルスードの勝利を確信しているのではなく、またその可能性が高いという根拠もないとすれば、ここで彼はアプルスードに《勝たせる》ことを決意しているのかもしれない。

9. ヴァルハラでの正解発表

いよいよ《正解発表》の時間が近づいてくる。ここから先は、登場人物の一挙手一投足にとりわけ注意して、語り手の言葉¹¹⁾を読み進まなくてはならない。

午後になっても店の中の三人の気は晴れない。だんだんと店のまわりを歩く人の数も増え、三時に店が開くと、すぐに人でいっぱいになり、さらに車道にまであふれ返り、誰もが楽しんでいる。語り手はアプルスードを探すが、その姿は見えない(160)。

ミスター・マーシャルが咳払いすると、店内に静寂が漲り、彼は封筒を示しながら、その中に正解が入っていることを告げ、もう一方の手の帳簿には人々の言った数字が書かれている、と告げる。誰も質問はない。そこで、ミスター・マーシャルは、「では、やっていただける方がいらっしゃるようにしたら…」と、正解を読む希望者を募る(160)。

そこへアプルスードが、人ごみを掻き分けながらやってくる。彼の服はいつも通りだが、髪や靴はきれいに手入れされ、後ろには妹のミディと、ヴァイオリン弾きの兄が続く。ミスター・マーシャルは、「それじゃきみが、手を貸してくれるかい」とアプルスードに尋ね、彼は肯く。反対する者はない。ミディは兄の肩越しに、ハムラビはソーダ・ファウンテンにも

たれてこの模様を見守る（160-61）。

静寂と緊張感の中、アプルスードは封筒からピンク色の紙を取り出し、「何であれそこに書いてあるものを、自分自身に向かって呟くように読んだ」。すると、「突然、顔面蒼白となり、目に涙が光った」。「もっと大きな声で読めよ」と客の一人が言う。そこでハムラビがその紙を取り、「咳払いして読み始めると、その表情はこの上なく滑稽な変化を遂げる」。そして彼は、「ああ、聖母マリアよ…」と呟く（161）。

これを見た人々は皆口々にもっと大きな声で読むように言い、R. C. ジャドキンスさんは、「ペテン師ども」と決めつける。ここでアプルスードの兄が拳を振り、モウズ町長(Mayor Mawes)が平静を呼びかけ、ミスター・マーシャルも椅子の上に飛び乗り収拾を試みる。実はルーファス・マクファアソンがR. C. ジャドキンスさんに金を渡して騒ぎを起こさせようとしていたのだった。そしてついに語り手が、「とにかく騒ぎが収まった時、その紙を持っていたのは、わたし以外の一体誰だったのだろうか…どんな経緯でそうなったのかは、訊いてはいけない」、と言い、正解を読み上げる（161）。

語り手が大声で、「77ドル35セント」と読み上げると、アプルスードの兄が進み出る。すると、「勝利者の名はすぐに広まった。そして、畏怖の念に打たれた、呟くようなささやきが嵐のようにまき起こった」（161-62）。どうやら、人々の間では、アプルスードの勝利は受け入れられたようである。

ところが、「なんと、アプルスード本人は、かわいそうな状態だった。彼はまるで、致命傷を負わされたかのように泣いていた」。ハムラビの肩に担ぎ上げられてようやく、アプルスードは涙を拭いて笑い始める。一方、不正と言いつけるジャドキンスさんの言葉は、喝采に掻き消されてしまう（162）。

10. 夢の《舞台裏》

かくして壇の中の賞金はめでたくアプルスードのものとなる。しかし、彼の答が本当に《正解》だったのかについては、疑問がいくつか浮かび上がる。まず、答を低声で読んだアプルスードの顔は青ざめ、目には涙が浮かぶ（161）。これをどう考えればよいのか。これまでの彼を見る限り、とくにつつましいところもみられず、自分の答えをそこに見出したのなら、当然大声でそれを読み上げるように思われる。顔を蒼くしている表情から、この涙が嬉し涙とは考え難い。アプルスードはやはり、自分の考えとは違った数字を見出したため、あるショックを受け、それを発表できず、涙をにじませている、と考えるのが自然ではないだろうか。

半泣きのアプルスードから答えの紙を取り、それを読もうとするのはハムラビである。彼は読み始めたとたんに表情を激変させ、「ああ、聖母マリアよ…」と呟く（161）。すでにみたように、ハムラビはアプルスードの努力を目の辺りにし、それが報いられない場合の責任をも感じていた（156）。ハムラビはアプルスードが壇の金を獲得することを心から祈ってきたのだ。アプルスードの答を見出したのなら、この先でそうなるように、真っ先に彼を肩車しているはずだ。そのハムラビが表情を変え、聖母に祈っている。これはアプルスードの成功への感謝の祈りではあるまい。おそらくハムラビもアプルスードの金額以外の数字を正解として見出し、それを嘆きつつ祈っている。この二人の表情からは、アプルスードの答が正解と一致したようにはとても思えない。どうやらアプルスードの答は壇の金額を言い当ててはいない。

ドラッグストアの店内は一時騒然となるが、それが収まると、「その紙を持っていたのは、わたし以外の一体誰だったのだろう」と語り手は言う。そして、「どんな経緯でそうなったのかは、訊いてはいけない」（161）、と

続ける。なぜ読者はこの間の経緯を詮索してはいけないのか。上に見たように、ハムラビとアプシーダの表情からはアプシーダの勝利の気配はないにもかかわらず、次の瞬間には彼の答えが正解となる。ここからは合理的な説明はできず、どうみても何らかの不正が行なわれたとしか考えられない。普通に考えるなら、答えの紙が語り手の手に落ちるまでにすり替えが行なわれた、ということになろう。

語り手は77ドル35セントと発表し、勝利者はアプシーダということになる。その直後の彼を、語り手は、「なんと、アプシーダ本人は、かわいそうな状態だった。彼はまるで、致命傷を負わされたかのように泣いていた」(162)と言っている。ハムラビに肩車された彼は、すぐに笑い出す。銀の壘を獲得したにもかかわらず、なぜ惨めな姿で泣いているのだろうか。それはおそらく、正解を一瞬でも目にした彼には、自分の力で賞金を手に入れたのではないことが、わかっているからだ。アプシーダの名は有名な開拓者の名でもある。開拓精神をおそらく受け継ぐ彼は、自分の力と運を信じ、壘の硬貨を数え尽くすという常識破りの《努力》を続けてきた。その結果として、彼は自分の力で銀の壘を手に入れられると信じていたのだが、実際はそうではなかった。ところが、それでもなぜか《勝者》となった、あるいはしてもらったアプシーダは、自分の誇りを傷つけられて泣いている。しかし彼は妹の齒のために壘を手に入れようとしている(162)ので、自分の答えが間違っていた、と言い出すわけにもいかない。勝者となってさらに惨めなアプシーダは、その背後で不正が行なわれたことを裏付けるように思われる。

結局、上に見た三つの点——正解を目にしたアプシーダとハムラビの表情、勝者となったアプシーダの表情、そして答えの紙が語り手にわたった「訊いてはいけない」経緯——から、彼の勝利には何らかの不正が絡んでいると考えざるを得ない。

11. ファンタジーとリアリズムの間で

しかし、アプルスードの勝利には、なぜ不正、もしくは何者かの操作が暗示されねばならないのか。また、アプルスードが超能力で賞金を獲得したのではいけないのだろうか。

アプルスードに超能力があったとして、その力で彼が賞金を獲得した、とすれば、不思議な少年の物語ということにはなる。そうした力を駆使してまで銀の壘を手に入れたかった、という彼の気持ちはある程度表現されるだろう。しかし、それだけのことである。彼が壘の金を得られたのは、彼にしかない超自然的な力のためであり、彼以外の人間には不可能なことで、一つのおとぎ話に過ぎない。一方、明らかに不正な手段で勝利を取めたということとなれば、それはまた《小さな奇跡》とはなりようもない。あからさまな不正での勝利は人の心を動かすようには思われぬ。超能力であれ、不正であれ、特別な条件の介入は作品の普遍性をそこない、現実にはあり得ない夢物語にしてしまう。

アプルスードは自分の《夢》を目指し、《幸運》を信じて《努力》を続けていた。実は何ら超能力もない普通の少年である彼が、実際に勝利する可能性はほとんどゼロに等しい。しかし、その真摯な姿勢は彼を見守る人々——アプルスード同様アメリカの夢を信じる人々——の心を動かす可能性がある。報われるべきでありながら、どう見てもそうはなりそうもない彼の努力を見かね、その人たちが手を差し伸べたとすれば、たとえ不正であっても、それはアプルスードの努力が引き起こした《奇跡》とはいえないだろうか。不可能を可能にしたのは、一途に《アメリカの夢》を信じ努力する、彼の姿勢なのである。

このように、超能力はなくとも、アプルスードの勝利は現実には起こりうる。しかし、彼自身の力だけでは無理だ。そこには、彼を勝利へと導こう

とする人の協力が、どうしても必要となる。それは不正という形をとらざるを得ないが、あからさまな不正も受け入れられない。どこかに不正はあるが、それが前面に出てはいけない。語り手の、アプルシードとハムラビの表情を描く語り手と、とりわけ「訊いてはいけない」という言葉は、不正の存在をぎりぎりまで暗示しながら、それを表には出さず、リアリズムと《奇跡》の橋渡しとなっているように思われる。

12. それでは、いったい誰が

それでは、誰がどのようにしてアプルシードを勝利へと導いたのだろうか。すでに述べたように、それが表に出されず語られるからこそ、彼の勝利に意味が出てくる。しかし、推測可能なところまで考えてみたい。まず、語り手は物語全体を見通し、正解の紙が自身に渡ったことについては、「どんな経緯でそうなったのかは、訊いてはいけない」（161）と言っているから、語りの段階では真相を知っていると思われるが、アプルシードがどうやって正解を知ったのか、彼の勝利の後でミディに尋ねている（162）ので、正解発表の時点では、登場人物としては勝利の理由は知らなかったと考え、除外することにする。もっとも、語り手自身は《アメリカの夢》についてあまり関わっていないようなので、アプルシードが語り手の心を動かしたとしてもあまり意味はないように思われる。

怪しいのはもちろんミスター・マーシャルとハムラビである。ミスター・マーシャルは自ら銀行へ出向き、《銀の壘》を受け取った張本人（151-52）であり、たとえば正解を記した銀行の用紙がピンク色だ（161）というようなことも、知っていた可能性がある。彼はアプルシードの《努力》に感心していた（156）し、発表直前は飾りつけを手伝うこともなく（159）、どこか態度は不自然である。また、アプルシードの77ドル35セントとの答

の申告の際にも、「ぼくが勝ったのか、いつわかるの」の問いに誰かが「クリスマス・イヴだよ」と答え、さらに「じゃ、明日ですね」と言うアプルシードに、「その通りだよ」と「驚きもせずに」答えた(159)、と語られている。このやりとりは、単なる日取りの確認とも取れるが、ミスター・マーシャルがアプルシードの勝利を当然視しているようにも取れる。このように、アプルシードの努力を目の辺りにし、彼に同情するミスター・マーシャルには、アプルシードを助ける動機はあるものと思われる。

そしてなんといっても、正解の書かれた紙を保管していたのはミスター・マーシャルである。もしアプルシードに勝たせなければ、いつでも答えを書き換えられる立場にいるはずだ。しかし正解発表ではアプルシードは正解を見て顔面蒼白となり、読むことさえできない(161)。そこには彼の答とは違う数字があったものと思われる。アプルシードを勝たせたいと思っていたであろうマーシャルは、そうしたければいつでも答えを書き換えられたのに、そうしていない。もし彼が実際に助けたのなら、わざわざ正解が人の目に触れてからその紙を差し替える、という、かなり危ない橋を渡ったことになる。正解発表の前日、飾り付けを語り手とハムラビに任せ、ミスター・マーシャルは、もしかしたら、勝てないかもしれないアプルシードを案じて、正解のすり替えを思案し、迷っていたのだろうか。

では、ハムラビはどうだろうか。すでにみたように、ハムラビは自身移民としての苦労を経験しており、おそらくそのこともあってアプルシードの努力が報われることを望んでおり、「あの子が失敗したときに責任のある人間になりたくない」(156)とまで言い、銀の壇の企画そのものを後悔してさえいた。ハムラビがアプルシードの成功に手を貸す動機は十分といえよう。しかし、正解発表の場面では、ハムラビはアプルシード同様、紙に書かれた正解を見て表情を一変させている(161)。すでに考えたように、ハムラビもその正解がアプルシードの答とは違っていたことに動揺を隠せなかったものと思われる。そうするとハムラビが関わっているなら、アプ

ルシードが正解を出せなかったことが分かってから答えの紙をすり替えることにした、ということになる。そのためには、正解がファースト・ナショナル銀行のピンク色の用紙（161）に書かれていたことを知っていて、それを用意しておかなくてはならない。これは全く不可能とはいええないかもしれないが、彼がこうしたことを知っていたとは作品からは解釈しがたい。

そこで、野暮を承知で考えてみると、正解の紙をすり替えられる立場にいるのは、やはりミスター・マーシャル以外にない。おそらく彼は、アプルシードの答の書かれた、偽の正解を用意していた。しかし、彼はそれを前もって本物の正解と置き換えはしなかった。店の飾り付けの場面で仕事手が手につかなかった彼は（159）、おそらく悩みに悩んだ。アメリカの夢の実現を優先すべきか、それとも企画の公正さを優先すべきか。アプルシードの努力を目の辺りにしてきた彼は、アプルシードが銀の壘を獲得しなくてはならない、とは思いますが、同時に主催者としての自分の立場も弁えている。ミスター・マーシャルには事前の正解のすり替えは、すなわち不正はできなかった。

しかし、正解発表の場面となって、本当の正解を見たアプルシードは、それを読み上げられない。目には涙を浮かべている（161）。それを見ておそらく、ミスター・マーシャルの気持は動いた。努力した子を泣かせてはいけない。アメリカの夢は実現しなくてはならない。おそらくそう考えたミスター・マーシャルは、使わないことにしていたアプルシードの答えの書かれた紙を、ここで正解として語り手に渡し、彼に読ませたのではないだろうか。ミスター・マーシャルの迷いと心の動きを考えると、アプルシードの勝利の舞台裏のシナリオの、一つの可能性として、このようなことを推測できると思われる。

結局、ミスター・マーシャルかハムラビが手をかさなければアプルシードは壘の賞金を手にすることはできないのは確かだが、さらに重要なのは、

アプルスードの《努力》が彼らの心を動かし、おそらくその力を借りる形ではあるが、いわば不可能が可能になった、という点であろう。そして、彼らの気持ちを駆り立てたのは、《努力》して自分の《運》に賭ける者が報われる、という《アメリカの夢》の物語を信じる気持ちであり、そういうアメリカでなくてはならない、とする信念だろう。アプルスードは、その真摯な姿勢により、登場人物の心を動かし、彼らの力を借りながら小さな《奇跡》を引き起こしたのだ。

13. 小さな奇跡から、小さな伝説へ

涙の勝者アプルスードは、ハムラビに肩車され、笑い始める。不正だ、と叫ぶR. C. ジャドキンスさんの声は、喝采にかき消される(162)。どうやら、この日店に集まった人々の多くも、彼の勝利を喜んでいるようである。これは、アプルスードの努力を見守っていた彼らも、ミスター・マーシャルとハムラビとともに、《アメリカの夢》の実現を期待しているからではないだろうか。

そのときミディが語り手の腕をつかみ、これで歯を治せる、と言い(162)、アプルスードの真剣な《努力》のわけがここではじめて明かされる。映画スターを夢見る妹ミディのために、アプルスードは頑張っていたのだった。

しかし、語り手の関心はむしろ、アプルスードがどうやって正解を知ったか、にある。彼はミディに尋ねるが、彼女は「数えた」と言い、それにお祈りをした、と言って、さらに「それに、兄さんは、幸運の帽子を頭に載せて生まれたのよ」と付け加える。これを聞いた語り手は、「謎解きに一番近づいたのがこの答えだろう」とコメントする(162)。

たしかに、実際には正解を割り出せなかったであろうアプルスードが銀の壘を手に入れられたのは、《幸運》のお陰といえよう。もちろんそうだ

が、それはまた、最初から自分の幸運を信じて、アプルシードが《努力》し、それが成功につながったからでもある。語り手はここでおそらく、《幸運》を信じて努力することの意味を暗示的に語っている。

アプルシード本人に尋ねたとしても、はぐらかされてしまうことだろう、と語り手は言い、そして彼と一家は何年か後にフロリダへ引っ越し、その後の消息はわからない。それでもアプルシードの伝説はいまだに町に残っている、と語り手は物語の最後で言い、その後のミスター・マーシャルとハムラビのささやかなエピソードで物語を締めくくる。それは、ミスター・マーシャルが、亡くなるまで、毎年のクリスマスに教会でアプルシードのことを語っていたこと、また、ハムラビはこの話をタイプで打って、いくつかの雑誌社に送っていた、ということだ (162)。

このことは、この二人にとっての、この出来事の大きさを表している。起こったことといえば、田舎の町で少年がどういうわけかクリスマス企画の賞金を獲得できた、というだけのことである。しかし、それは、すでに何度かみたように、《小さな奇跡》であり、ミスター・マーシャルにとっては、《アメリカの夢》は死なず、という証明なのだ。

しかし、《小さな奇跡》はやはり、小さなものに過ぎない。ハムラビの原稿はいつも送り返された。ある編集者は、「もしその女の子が本当に映画スターになったのなら、あなたの話にも素晴らしい点 (something) がある、ということになるかもしれません」という返事をくれた。「しかし、そういうことは起こらなかったから、いったいなぜ嘘をつく必要があるのか」と語り手は物語を締めくくる (162)。結局、ミディが映画スターになるという、《大きな夢》は実現せず、アプルシードの物語は、彼が銀の壺を手にしたところで終わってしまう。《アメリカの夢》は生き続けているものの、それは全アメリカ人の心を動かすほどのものとはならなかった。《小さな奇跡》は、小さなままで終わったのである。

結論にかえて

アプルスードにはおそらく、超能力はない。彼自身はしかし、《幸福の帽子》をかぶって生まれてきたと言われる、自分の運を信じ、《銀の壘》に向かってもまじめな《努力》を注いでいる(154)。だが、壘の硬貨の枚数は、彼には数えられてはいない。彼の77ドル35セントは正解ではなく、そのため正しい答を見てもそれを発表できないし、そのあと泣き出してしまうことになる(161)。だが、《努力》を惜しまず、自分の《運》に賭ける彼の態度は、ミスター・マーシャルとハムラビの心を動かし、それが《小さな奇跡》を呼ぶことになる。

ミスター・マーシャルのヴァルハラ・ドラッグストアは、北欧神話の《ヴァルハラ》がそうであるように、傷ついた勇者が甦る場所となる。《アメリカの夢》にかけたアプルスードは、自分で正解にたどり着けなかったことを知り、惨めな表情となるが、すぐに明るさを取り戻す(162)。それとともに、《アメリカの夢》がもはや消滅したのでもなかったことが確認される。ミスター・マーシャルのドラッグストアは、このように、《アメリカの夢》の甦りを称えるヴァルハラ＝記念堂、という意味をもつ。

正解を見た時の様子を、語り手は「なんと、アプルスード本人は、かわいそうな状態だった。彼はまるで、致命傷を負わされたかのように泣いていた(He was crying as though he was mortally wounded.)」と伝えていた(162)。動詞 wound は、通常銃や刀剣による傷害を表し、ここではこれによってアプルスードがヴァルハラにふさわしい戦士であることが暗示される。自分の力と運を信じて闘ってきた《アメリカの夢》の戦士アプルスードは、ここでいったん傷ついたが、次の瞬間、ハムラビに肩車され(162)、勝者として《甦る》。北欧神話の通り、彼は傷ついた戦士として、司令官マーシャルの司るヴァルハラの中で《アメリカの夢》とともに甦るのだ。

《ヴァルハラ》の伝説、物語はこのようにして形となる。

ミスター・マーシャル自身、まじめな努力で壘を手に入れようとするアプルシードの姿に悩まされ、たとえばクリスマスの飾りつけも手につかない状態だった(159)。彼はハムラビ同様、《アメリカの夢》を信じ、アプルシードの努力が実を結ぶべきだと考え、また彼の努力が無に帰してしまうことを心配している。

ハムラビはエジプトからの移民ということで、アメリカという土地にかける期待はおそらく強く、《アメリカの夢》が実現しなければならない、という気持ちも強い。ハムラビもまたアプルシードの努力が実を結ばなくてはならない、と考えている。「ある種の歯医者」といわれる彼の仕事は、うまく行っているわけではなく(151)、いわば移民の苦労の一端を経験しているハムラビにとっては、アメリカは《夢》の実現する場所であって欲しいし、そうでなくてはならない。おそらくそうした事情もあり、ハムラビはアプルシードを心配し、その成功を祈ってもいる(155, 156, 159)。

上に述べたように、おそらくアプルシードには特別な能力はないし、正解にたどり着いてもいない。しかし、彼は「銀の壘」を手にする(162)。それは、たぶん、彼の真摯な態度がミスター・マーシャルとハムラビの心を動かしたからだ。すでに考えたように、この二人のうちのどちらかがアプルシードを助け、彼を勝たせたように思われる。店の企画としてはいわば《不正》があった、ということになる。しかし、それで彼の勝利の価値がなくなったかということ、そうではない。

逆にアプルシードが、超自然的な《超能力》によってではなく、結果的に人の心を動かすということによって、銀の壘という夢を手にしたことに価値があるのではないだろうか。アプルシードの《努力》が無に帰してしまうことは、このふたりには耐えがたいことだった。《不正》という非常手段に訴えても、《アメリカの夢》は守り通すべきではないか。このような経緯をたどったであろう、アプルシードの成功は、この《アメリカの夢》

のもつ意味の大きさを証明しているように思われる。

結局アップルシードが目指していた、大きな夢——ミディのハリウッド・デビュー——は実現せず、小さな夢の実現は小さいままで終わり、そのためハムラビの手記は活字として日の目を見ることはない。しかし、彼はこの出来事を雑誌で発表したいと思うし、ミスター・マーシャルは死ぬまで聖書研究会のクリスマス集会でこのエピソードを語る（162）。アップルシードの物語は、それほどかれらにとっては大切だった。それは、ふたりが《アメリカの夢》の神話を信じていたからだ。アップルシードの勝利は結局、この《アメリカの夢》の物語が、それを信じるふたりの心を動かして実現した奇跡だ、とは言えないだろうか。

Notes

- 1) この作品は、1945年12月の『マドモアゼル』(*Mademoiselle*)誌に掲載され、その後1949年に短編集『夜の樹』(*A Tree of Night*)に収められた。Clarke, 85-86, 194. 稲澤, 244. 川本三郎氏の「アラバマ時代の思い出から生まれている」のことは通り、少年時代を過ごした南部を舞台とした作品の一つである。川本, 289.
- 2) 夢の実現、という点については言及されている。稲澤秀夫氏は、この夢を「うじうじした世界に住む人間の、解放の夢というか、楽園の夢である」、とし、また、「外向性の夢、表現できる夢なのだ」と指摘されている。稲澤, 21.
前田圓氏は、「昼のスタイル」(注4参照)の作品の特色を「テーマの面白さ」と「ストーリー構成の妙」とし、この作品のテーマを「主人公アップルシードの夢の実現」とされている。前田, 375.
本稿では、いわゆる《アメリカの夢》との関連を検討したい。前田氏は、登場人物のミディの役割として、「すなわち、ミディは、一人娘をハリウッドのスターにして、一家安楽に暮らすというアメリカン・ドリームを引き出すモチーフだったのである」と、この点に言及されている。前田, 380.
- 3) 本文中の括弧つきの数字は、すべて Capote, *The Grass Harp* 所収の“Jug of silver”からの引用ページ数を表す。本稿でこの作品から引用する場合は、直接引用・内容の要約を含め、煩雑を避けるため、同一箇所(同一ページ)からの引用の最後にはのみページ数を表示してゆく。引用文の翻訳にあたっては、川本三郎氏の訳を参考とさせていただいた。
- 4) 前田圓氏の「トルーマン・カポーティの『銀の瓶』におけるハムラビ」(前田, 373-

408) が、この作品に的を絞って詳しく検討した唯一の本格的論考と思われる。前田氏は、「テーマと構成」、「登場人物」、「ナラティブ（語り）」、「ユーモア」、「終わり方について」といった面からこの作品を論評されている。

ポール・レヴァインは1958年の論文の中で、「カポーティの物語は二つの世界、すなわちリアリスティックで、口語的で、しばしばユーモラスな昼の (daytime) 世界と、夢想的で、超然とした、内向的な夜の (nocturnal) 世界とで展開する、といえるかもしれない」とのべ、カポーティの作品を昼の作品と夜の作品に分類している。Levine, 602. 「銀の塚」は昼の作品に分類される。Levine, 602.

イーハブ・ハッサンは、著書 *Radical Innocence* の中で、カポーティ作品を「夜のスタイル (nocturnal style)」、「昼のスタイル (daylight style)」に分類している。Hassan, 231. ハッサンは、「夜のスタイル」の特色として、無意識の中の願望と恐怖、自己発見のための破壊的な要素としての夢が描かれるとともに、神話やおとぎ話といった寓話の世界をも呼び起こし、超自然的な要素が呼び起こす感情に訴えかける、とする。Hassan, 231-32. これに対して「昼のスタイル」の特徴は現実的なユーモアにあり、それは連帯の形式として社会的な意味を持つ、という。Hassan, 233-34. 「銀の塚」は「昼のスタイル」の作品として分類されている。Hassan, 238.

稲澤秀夫氏は、『夜の樹』全体の論考の一部で、この作品にはハッサンの「昼のスタイル」が当てはまるとしながら、アップルシードの執拗さ、偏執は、ミリアム (Miriam) などの「夜のスタイル」の主人公と本質的に同質だ、と指摘されている。稲澤, 21-22.

前田圓氏もこの「昼のスタイル」、「夜のスタイル」の用語を踏襲し、この作品を「昼のスタイル」の佳作とされるが、また、カポーティ自身はこの分類を退けている点も指摘されている。前田, 374-75.

越智博美氏もこの作品を、「誕生日の子供たち」、「ほくにだって言いぶんがある」とともに、「昼の文体」の作品として紹介されている。越智, 267-68.

- 5) アプルシードの答えが正解と認められ、彼が銀の塚を獲得したことについて、越智博美氏は、「それはクリスマスの奇跡だが、アップルシードが本当に言い当てていたのか、彼を日々見つめていたマーシャルがアップルシードの申し出た数字に正解を書き換えたのか、その答えは読者にゆだねられている」、と不正が行われた可能性に言及されている。越智, 268. アプルシードの超能力による勝利を疑う論評は、このほかにはないようである。
- 6) デイビッドソン, 54-55.
- 7) この「にもかかわらず、彼は素晴らしい人物だった (Nevertheless, he was a nice man.)」という語り手のコメントについて、前田氏は、このように付け加えなくてはならない必然性がないことを指摘のうえ、商売敵ルーファス・マクファーソンを「悪人 (a villain)」（151）と呼ぶのに対応している、と説明され、「さらに、マー

シャルという名とその風貌から、厳しい marshal (司令官・警察署長) を連想させる叔父が、本当は、スモール・タウンでみんなに愛される‘いい人’であることは、この短編の最後になって納得的にわかることになっている」、と、その名のいかめしさも付け加えの一因、と解釈されている。前田, 387.

筆者には、傷ついた戦士の館ヴァルハラを取り仕切る元帥閣下, 司令官閣下, と呼ばれながら軍人的ではない、という意味がこめられているように思われる。

- 8) ハムラビは、歯医者の仕事がうまくいっていない (151) とされる一方、ニューヨークからエジプト煙草を取り寄せる (152) 余裕をも見せている。河野一郎氏は前者の点に関連して、「エジプトからやって来た移民らしい上がらない歯医者ハムラビなど、社会の弱者を見る作者の目も温かい」(河野, 248-49) とされ、一方、前田圓氏は、「エジプトからの移民ながら、ハムラビはインテリで、また、わざわざニューヨークから郵便でエジプト煙草をとりよせるほどの経済的余裕もある」と指摘、河野氏の意見を間違いとされている (前田, 385, (注7))。語り手のハムラビの描き方は多面的で、たしかに彼を「社会の弱者」の一員とみなせるかは微妙と思われる。その一方で、現在では経済的余裕があるにせよ、ハムラビが移民の苦労を味わったことは想像に難くはなく、それゆえ、彼がアプルスードに向ける同情も理解できるように思われる。
- 9) ミディについて、前田氏は、「アメリカンドリームを引き出すモチーフ」であり、カポーティの創作上の「新しい工夫」である、とされている。前田, 380.
- 10) 「幸運の帽子」は、前田氏によれば、「誕生に際して、時に胎児の頭部を覆っている羊膜の一部で、幸運の印とされる」とのことである。前田, 380.

これに関しては辞書によって説明に多少の違いがあるようである。『研究社大英和辞典』では caul に「大網膜」と訳を示し、「昔これを吉兆として「幸福の帽子」と称し、水難よけのお守りとした」とのことである。『ジーニアス英和大辞典』では、同じ訳とともに、「この一部を持って生れた子は悪魔から守られるとされた」と付記されている。この作品ではもちろん、幸運の印、である。

- 11) 語り手である「わたし」の言葉について、前田氏は、たとえばミスター・マーシャルはよい人なのに対して、ルーファス・マクファーソンは悪い奴だ、という具合に、語り手の言葉は主観的で、アプルスードにも好意的とは言えない、という点を指摘されている (前田, 388-89)。たしかに語り手の語りは、指摘の通り主観的で、客観性を欠いている点も多いが、たとえば正解の紙の出所について、「訊いてはいけない」(161) と逃げはするものの、語り手によって事実関係が捻じ曲げられているようには思われぬ。もちろん語り手の言葉を信じる以外ないのだが、この意味で彼の証言は信用できると思われる。

Works Cited

Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. New York: Carroll & Graf Publishers, 1988.

- Capote, Truman. "Jug of Silver." *The Grass Harp: Including A Tree of Night and Other Stories*. New York: Vintage International, 1993.
- デイビッドソン, H.R. エリス. 米原まり子, 一井知子訳. 『北欧神話』東京: 青土社, 1992.
- 稲澤秀夫. 『トルーマン・カポーティ研究〈増補版〉』東京: 南雲堂, 1985.
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Nobel*. Princeton: Princeton University Press.
- 川本三郎. 「解説」カポーティ著, 川本三郎訳. 『夜の樹』. 東京: 新潮社(新潮文庫), 1994.
- 河野一郎. 「訳者あとがき」トルーマン・カポーティ著, 河野一郎編訳. 「カポーティ短編集」東京: 筑摩書房(ちくま文庫), 1997.
- Levine, Paul. "Truman Capote: The Revelation of the Broken Image." *The Virginia Quarterly Review* 34 (1958): 600-17.
- 前田圓. 『アメリカ小説の60年代——新しい語りの模索』福岡: 海鳥社, 2006.
- 越智博美. 『世界の作家 カポーティ——人と文学』東京: 勉誠出版, 2005.